

保守系オピニオン誌における外国人言説 (4) —2010年代における雑誌『SAPIO』を中心に—

Discourse on Foreigners in Japanese Conservative Opinion Magazines (part 4) :
Focusing on Magazine Articles of *SAPIO* in the 2010's

倉 真 一

本稿は、保守系オピニオン誌『SAPIO』における2010年代の外国人言説を分析したものである。分析の結果、明らかになった点は以下のとおりである。

第一に、2000年代に現れた移民や外国人を管理する主体としてのネーションは、2010年代に入っても「外国人参政権法案」や「ヘイトスピーチ」、「年間20万人移民受け入れ構想」といった政治的争点が浮上するたびに、同誌上において再確認されていた。

第二に、2014年の特集記事「移民と在日外国人」において、「移民国家ニッポン」というビジョンを実現する統治的主体として、移民や外国人を管理する主体としてのネーションは位置づけられた。外国人や移民が「日本的な価値観や美徳、文化や慣習」を受け入れる(=同化)客体として構築される一方、統治的主体としての「われわれ」=ネーションは、彼らを教導する「寛容な」主体として構築された。

第三に、移民や外国人を管理する主体としての潜在能力を発揮できない(移民や外国人を十分に客体化できない)事態に直面する時、「移民国家ニッポン」というビジョンは揺らぎ、それを実現すべき統治的主体としてのネーションの不安が惹起されることになる。2010年代後半、特に2018年の2つの特集記事を通じて、さらに「移民国家ニッポン」というビジョンの揺らぎ、統治的主体の不安全感や無能感へと進んでいった。その結果、特集記事での移民や外国人のイメージも、ポジティブとネガティブ両方を含むものから、外国人犯罪に象徴されるネガティブなイメージのみが前景化していった。

第四に、2010年代の雑誌『SAPIO』における外国人言説は、同誌の創刊当初の外国人言説を特徴づけていた「混住社会ニッポン」というビジョンの揺らぎとその失効の過程と重なり合う。「移民国家ニッポン」というビジョンとその揺らぎは、『SAPIO』誌上における外国人言説の四半世紀を経た回帰としても把握できるものである。

キーワード：『SAPIO』、「移民国家ニッポン」、統治的主体としてのネーション、回帰する外国人言説

目次

- I はじめに
- II 雑誌『SAPIO』の外国人言説の変遷とその概要—創刊(1989年)から約20年間の特集記事—
- III 第六期(2009年後半～2019年)の在日外国人・移民関連記事
 - 1 第六期前期(2009年後半～2014年)
 - (1) 「外国人参政権法案」と「ヘイトスピーチ」—再確認される移民・外国人管理／国境管理の主体としてのネーション—
 - (2) 「移民国家ニッポン」というビジョン—特集「移民と在日外国人」—
 - 2 第六期後期(2015年後半～2019年)
 - (1) 統治的主体の不安—特集「在日外国人256万人の光と影」
 - (2) 「移民国家ニッポン」というビジョンの揺らぎ—ネガティブ化する移民・外国人のイメージ—
- IV おわりに—一回帰する外国人言説—

I はじめに

筆者はこれまで保守系オピニオン誌である『SAPIO』（小学館刊）における在日外国人や移民をめぐる言説を、1989年創刊から2000年代に至るまで考察してきた[倉,2007][倉,2008][倉,2009]。本稿では、その後の約10年間、2010年代の在日外国人や移民をめぐる同誌の言説について引き続き考察を行う。

保守系オピニオン誌のなかでも、特に雑誌『SAPIO』の記事を分析対象とした理由は、第一に同誌が1989年の創刊以来、継続的に在日外国人や日本への移民に関する記事を掲載してきたこと。こうした在日外国人や移民への継続的な関心は、『文藝春秋』や『諸君』、『正論』、『Views』や『Voice』など他の保守系オピニオン誌には見られない特徴であること[倉,2007:116]¹⁾。第二に「国際情報誌」を標榜する同誌の記事を考察することは、グローバル化という文脈において現れる「外国人」や「移民」という他者に映し出されたナショナリズムを、約30年間という比較的長期のスパンで考察できる数少ない雑誌メディアといえるからである。

倉橋耕平は、1990年前後に相次いで創刊した『Bart』（集英社）、『Views』（講談社）、『This is 読売』（読売新聞社）、『マルコポーロ』（文芸春秋）など、コンビニ販売で三代男性をターゲットとした月刊または隔週刊のA4変型判「国際派ビジネスマン向け」「国際情報誌」の多くが²⁾、雑誌『SAPIO』を除き市場論理による淘汰によって90年代までに廃刊となった点を指摘している[倉橋,2018]。このように約30年間にわたって刊行を続けてきた雑誌『SAPIO』であるが、2019年をもって定期刊行をやめ不定期刊行に移行している³⁾。

定期刊行誌としての『SAPIO』の最終盤、2010年代における在日外国人や移民に関する言説を

分析する前に、創刊から2000年代までの約20年間の同誌のそれを簡単に概観しておきたい。

II 雑誌『SAPIO』の外国人言説の変遷とその概要 —創刊(1989年)から約20年間の特集記事—

創刊から不定期刊行化に至る約30年間の雑誌『SAPIO』の在日外国人や移民に関する記事のうち、ここでは特集記事に限定して表1にまとめた。同誌には、< SIMULATION REPORT >、< SPECIAL REPORT >、< INVESTIGATIVE REPORT >などと銘打った特集記事が掲載されており、それは在日外国人や移民に関する記事においても同様で、実際に各種< REPORT >の形で多くの特集記事が組まれてきた。特に1991年から2004年までは、ほぼ毎年のように『SAPIO』誌上で在日外国人・移民関連の特集が組まれており、それ以降は特集記事としての掲載頻度は落ちたものの、不定期刊行となる直前の2018年12月号まで、同誌における在日外国人・移民に関する特集記事の掲載は続いていた。これまで筆者は同誌の外国人言説の継時的な変化を分析するため、創刊から2000年代までの約20年間の第一期～第五期まで5つの時期に区分してきたが、本稿ではその後の不定期刊行までの時期を新たに加えて第六期としている(表1参照)。

創刊から1993年までの第一期の同誌を象徴するキーワードは「混住」である(特集①～③)。ここで混住を想定される外国人は、抽象的かつ日本人との同質性が高い外国人として描かれていた。そのため外国人移民が具体的かつ異質性を帯びた存在としてイメージされるようになると、「混住」というビジョンは揺らぎ、やがて失効した。かわって1990年半ばの第二期では外国人犯罪が記事のトピックの前面に出るようになる(特集④)[倉,2007]。

1996年から1998年前半の第三期になると、「ボーダレス」や「融解」といったキーワードによって、外国人との境界の揺らぎとナショナル・アイデンティティの不安の言説が現れる(特集⑥⑦)。1990年代末の第四期(前)に入ると、「パワー」や「生き様」といったキーワードによって、外国人移民の主体としての強さが強調されるようになる(特集⑧⑨)[倉,2008]。

やがて2000年代に入り第四期(後)になると、外国人に見いだされた「強さ」は、「有益」な外国人と「有害」な外国人という二つのイメージに分化していった(特集⑩～⑬)。同時に、日本というネーションの「弱さ」「無力さ」が、特に外国人犯罪の特集記事で強調されていく。こうした無力さの表明は、第五期(前)の2000年代半ばの「治安」をキーワードにした特集記事(特集⑭～⑯)を通じて反転し、第五期(後)の2000年代後半の二項対立的な論争形式の特集記事(特集⑰⑱)において国境を管理し、移民を国益に沿って(有益か有害か)選別する主体としての強いネーション(国民)のイメージが現れた[倉,2009]。

表1 雑誌『SAPIO』における在日外国人および移民関連の特集一覧（掲載年月日順）

時期区分	掲載号	特集名
【第一期】	特集① 1991年11月14日号	織田信長の「混住思想」に学べ
	特集② 1992年12月10日号	混住後進国ニッポンをうろたえさせる「外国人犯罪」
	特集③ 1993年9月23日号	外国人犯罪黒書 新宿・池袋をNY並に放置したのは誰だ！ 新聞が真剣に論じようとしないう「混住社会ニッポン」の陥穽
【第二期】	特集④ 1994年10月27日号	犯罪輸出大国・中国の畏 新宿歌舞伎町を戦慄の街に変えた 国際盲流の実態
	特集⑤ 1995年4月13日号	「新韓国人」はチャンスの島ニッポンをめざす
【第三期】	特集⑥ 1996年6月12日号	「日本」よ、お前はいったい何ものか？
	特集⑦ 1997年1月15日号	「外国人たちのニッポン占領」拡大する無法地帯と、ボーダレス・ビジネス…融解を始めた「日本」の最前線レポート
【第四期】	特集⑧ 1998年7月8日号 (前)	「在日コリアン・パワー」が日本を動かす スポーツ、芸能からビジネスまで 変貌するマイノリティの世界
	特集⑨ 1999年3月10日号	激変 日本人が知らない在日外国人の生き様
(後)	特集⑩ 2000年6月14日号	「お雇い外国人」プロジェクト
	特集⑪ 2000年11月22日号	台頭する新ニッポン人 ポスト団塊世代からコリアン・ジャパニーズまで
	特集⑫ 2001年10月10日号	戦慄の「凶悪中国人犯罪」
	特集⑬ 2002年3月13日号	これでいいのか！「犯罪天国」日本
【第五期】	特集⑭ 2002年11月13日号 (前)	ニッポン「治安非常事態」を宣言する
	特集⑮ 2003年9月3日号	日本の「国防&治安」大革命
	特集⑯ 2004年5月26日号	犯罪大国ニッポン「新・闇の帝王たち」ITとグローバルイゼーションを武器に日本の治安を脅かす新たな病巣を摘出する
(後)	特集⑰ 2004年11月14日号	外国人「入れる」VS「入れない」大論争
	特集⑱ 2006年3月22号	朝鮮人からインド人まで、いまや全人口の2%超 「在日パワー」激変絵図
	特集⑲ 2008年7月9日号	「移民」は救世主か問題児か
【第六期】	特集⑳ 2014年6月号 (前)	政府・自民「年間20万人受け入れで」どうする 移民と在日外国人 各界論客たちも誌上大激論
	特集㉑ 2015年2月号	「在日特権」あるのか ないのか 徹底的に調べてみた
(後)	特集㉒ 2018年8月号	在日外国人256万人の光と影
	特集㉓ 2018年12月号	外国人大流入で何が起きているか

(注) 大宅壮一文庫「雑誌検索データベース Web OYA-bunko」(<https://www.oya-bunko.com/>)にて検索(検索キーワード：外国人)、特集に含まれる記事内容を確認のうえ筆者作成。

本稿では、第五期における国境を管理し、移民を選別する主体としてのネーション（国民）とそのイメージが、その後の第六期の雑誌『SAPIO』誌上においてどのように変容していったのか。またそれと連動して、どのような外国人言説が展開されていったのか考察していく⁽⁴⁾。

III 第六期（2009年後半～2019年）の在日外国人・移民関連記事

1 第六期前期（2009年後半～2014年）

(1) 「外国人参政権法案」と「ヘイトスピーチ」—再確認される移民・外国人管理／国境管理の主体としてのネーション—

この時期の『SAPIO』における在日外国人・移民関連記事の特徴は、その時々には浮上する政治的争点に対して、第五期に登場した外国人・移民管理／国境管理の主体としての「われわれ」＝ネーションの観点から批判や論争が展開されることにある。

まず最初に登場した争点は、民主党政権（2009年～2012年）のもとで成立が目指された「外国人参政権法案」であった。同法案に対する、保守派の論客（西尾幹二、八木秀和、小林よしのり、百地章、櫻井よしこ）による批判を掲載した一連の記事（2009年8月5日号、2010年2月17日号、5月12日号、5月26日号、6月9日号）を代表して、小林よしのり「ゴーマニズム宣言『外国人参政権』という売国法案を許すな！」（2010年2月17日号）を取り上げてみたい。

同氏の批判の主旨は、同法案が国家主権の放棄であり、国家を中国や韓国といった他国に売り払う「売国法案」であり、国際的にも外国人参政権の付与はあくまで限定的ケースであって、法案への反対は「偏狭なナショナリズム」でも「排外主義」でもなく、「マトモな国家・国民意識があれば」「国民固有の権利」である参政権を、「国民」でない外国人に与えられない、という点にある。他の保守系論者の批判も基本的に同様の主旨と考えてよい。

ここでは「国民」（の固有の権利）という観点から、外国人への地方参政権付与への批判が展開されている。もう一点、「国民」の観点からの批判という文脈で興味深い点は、永住外国人への地方参政権付与が、安全保障上重要とみなされている国境（対馬、沖縄・与那国島など）の島々への外国人による「侵略」（西尾幹二,2009年8月5日号）、「乗っ取り」（小林よしのり,2010年2月17日号）として批判されていることだ。ここでは外国人・移民管理の意志と能力を持つ「われわれ」＝ネーション（国民）という主体は、国民国家の境界線（国境）の管理の主体としても想像されている。第五期において治安問題（外国人犯罪）への不安から外国人管理・選別する主体としてのネーション（国民）という主体が構築されたが、同じ主体が「外国人参政権法案」への批判を通じて、安全保障問題（国防）への不安から国境管理の主体としても構築されているのである⁽⁵⁾。

表2 第六期前期の『SAPIO』在日外国人関連記事（2009年後半～2015年前半）

2009年	
8月5日	< SPECIAL REPORT > 民主党政権・鳩山内閣への重大なる懸念
〃	外国人参政権 「日本列島は日本人だけの所有物じゃない」という“友愛精神”の耐え難い軽さ(西尾幹二)
〃	マトリックス 鳩山「次の内閣」閣僚たちの政治スタンスを徹底検証 日米安保、日教組教育、慰安婦問題、外国人参政権…左右見事バラバラ (八木秀次)
2010年	
2月17日	ゴーマニズム宣言 「外国人参政権」という売国法案を許すな！(小林よしのり)
3月10日	「卒業式も日中2か国語」という中国ルーツ児童在学校の“難題” 「全国学力テスト結果発表」で橋下府知事も特別顧問・藤原氏を派遣(恩田勝巨)
5月12日	< SPECIAL REPORT > 詭弁を弄する悪い奴ら 無知 憲法解釈も世界常識も間違いだらけの「外国人参政権問題」 『『住民』に外国人が入るのは当然』、「相互主義の立場から認めよ」ほか(百地章)
5月26日	< SPECIAL REPORT > 中国「対日戦略」が変わった！ 人脈「親中派」鳩山民主党政権は「与し易し」と足下を見られている 尖閣問題、東シナ海ガス田問題、沖縄総領事館問題そして外国人参政権でも押し切られるぞ(本誌政界特捜班)
6月9日	< SPECIAL REPORT > まだ小沢一郎なんですか 直言 「普通の国」を目指した小沢サンは権力闘争のために「異常の国」を作ろうとしている「中国への卑屈外交」「外国人参政権」「選挙優先のバラ撒き」…(櫻井よしこ)
2011年 (該当記事なし)	
2012年	
6月6日	告発すっば抜き 合格者1人に8000万円を投じる「外国人介護士受け入れ制度」は官僚だけが得をする 「人材育成」の美名の下に、ここにもあった役人の“打ち出の小槌”！(出井康博)
2013年	
9月	< SPECIAL REPORT > ブラック社会が日本を呑み込む 労働 「時給287円」「被曝し放題」本物のブラック企業はここまでやる 外国人技能実習制度を悪用、暴力団も暗躍(鈴木智彦)
10月	< ANALYTIC REPORT > 韓国は先進国になれない 差別 おぞましいヘイトスピーチを繰り返せば世界は日本を韓国と同じ「民度の低い国」と見なす「ゴキブリ朝鮮人を日本から叩き出せ」「毒を飲め」「首を吊れ」(本誌編集部)
2014年	
5月	おバカ規制の責任者出てこい！ 条文の裏の裏シリーズ 19回 出入国管理法 「移民受入れ」の前に「外国人が和食の料理人になれない」トンチンカンな規制を見直せ(原英史)
6月	< INVESTGATIVE REPORT > 移民と在日外国人 政府・自民「年間20万人受け入れ」でどうなる？ 各界論客たちも誌上大激論！
〃	データ分析① 移民は【必要】だ 人口、GDPはもちろん年金さえもプラス 世界の実情が「移民は国を救う」と示している アメリカでは雇用は奪われなかったし、賃金も上がった(小黒一正)
〃	データ分析② 移民は【不要】だ 生産年齢人口の年間減少幅は総人口の1%未満 国民の生産性を高めれば国力は維持できる 台湾では貧困で出生率が低下し、スウェーデンでは若い

- 移民の40%が失業(三橋貴明)
- ” 心構え 外国人に「日本の価値観」を理解させるために私たち自身も伝統と美德を取り戻すべきです。ヘイトスピーチは「日本人の心」に反す(桜井よしこ)
- ” 文化 茶碗の扱い、靴を揃える向き、電車の乗り方 私も苦しんだ文化や生活習慣の違いは大きな壁だ。「数合わせ」で同化できなければ新たな対立と差別を生む(呉善花)
- ” 政策 自民党国際人材議員・小池百合子会長に「移民受け入れ」と「将来のリスク」で直撃! 「建設労働者が足りないから」で安易に決めていないか(本誌編集部)
- ” 歴史 太古から世界の人材と文化を受け入れてきた日本の寛容を知れ 朴正熙が私に語った欧米諸国にはなかった日本の先進性(石原慎太郎)
- ” 逆転の発想 狭い日本に1億3000万人は定員オーバーだ 高付加価値経済なら「強く美しい小国」ができる 単純労働者の移民を多く受け入れれば財政にマイナスになる(森永卓郎)
- ” 参政権 EU型、英連邦型、北欧型……「外国人参政権」を論じるには、まず「国益」を示せ イギリスとニュージーランドの関係を日本の在日朝鮮人にあてはめられるか(本誌編集部)
- ” 差別 在日コリアン、在日中国人との共生をぶち壊す先進国として恥ずかしいヘイトスピーチ ある女子中学生はコリアンタウンで「在日コソチョンコ! 虐殺を実行しますよ」と叫んだ(本誌編集部)
- ” トラブル すでにゴミ出し、学校、病院で悲鳴 避けて通れない「外国人スラム」の重荷 「日本語の話せない隣人」とどう付き合うか(本誌編集部)
- ” 世界 移民受け入れ先進国の制度・法律とメリット、デメリットはどうなってる? 不法移民の合法化を狙うオバマ政権、中国人が占領するスペイン(本誌編集部)
- ” 少子化対策 増税してバラ撒き公共事業、育休3年は大失策! 安倍政権は出生率1・86の「奇跡の村」に学べ 行政のスリム化で予算捻出、子育て世帯に格安住居を提供する長野県下條村(岸川貴文)
- ” 長期的視座 「人間力」の時代 78回 特別版 右翼も左翼も関係ない、国を愛し憂えるならば世界唯一の「ニッポン移民システム」を作れ 付け焼刃の「足りないから入れる」だけでは必ず失敗する(大前研一)

2015年

- 2月 < SIMULATION REPORT > これで、日本は甦る 緊迫する対外関係 移民 「移民政策」を推し進めれば日本はフランスの二の舞になる いまや仏では基本的な安全さえ危ぶまれている(ジャン＝マリー・ル・ペン)
- 2月 < INVESTGATIVE REPORT > 「在日特権」あるのか ないのか 徹底的に調べてみた
- ” 提言 ヘイトスピーチは論外だが、「特別永住者制度」は見直すべきだ 戦後70年、日韓基本条約締結から50年の今年は大きな節目となる(八木秀次)
- ” 検証 生活保護から通名使用まで「在日特権」の真実とウソがわかった 役所、企業、在日コリアンほかを徹底取材!(本誌編集部)
- 特別永住者制度 歴史的経緯から「配慮」されて生まれてきた/ 生活保護 在日コリアンの受給率が高い理由/ 税金 過去には在日コリアンへの税の減額措置があった/ 民族学校・教育 他の外国人学校と変わらない/ 通名 過去には通名の変更が容易で犯罪に使われたケースもある
- ” 在日3世が語る「差別」と「特権」本当のところ 日本人にはわからない苦悩ととまどい(李策)
- ” 在特会の研究 橋下市長との公開対談によって在特会は崖っぷちに追い込まれている 会員数1万5000人にまで達した組織の行方(安田浩一)

(注) 大宅壮一文庫「雑誌検索データベース Web OYA-bunko」(<https://www.oya-bunko.com/>)にて検索(検索キーワード:外国人)、記事内容を確認のうえ筆者作成。

同じ第六期前期における特集『「在日特権」あるのか ないのか 徹底的に調べてみた』（2015年2月号）は、社会問題化した在日コリアンへのヘイトスピーチ問題に対して、「在日コリアンが特権を得ていると主張する人々」が訴える「在日コリアンに与えられる特権は本当に存在するのか」検証を試みている。記事では「在日特権」と主張される「特別永住者許可」「生活保護」「税金」「民族学校・教育」「通名」について、概ね在日コリアンの歴史的経緯への配慮として作られたもの、あるいはすでに解消されたものであり、これらを「在日特権」とする根拠はないとの判断を示している。

そのうえで特集の冒頭記事において、在日コリアンへの「ヘイトスピーチは単なる民族差別」であり論外だが、在日コリアンに与えられる「特別永住者制度」は見直すべき（八木秀次, 2015年2月号）、との提言を掲載している。提言のなかで特徴的なのは、「特別永住者制度」の見直しは在日コリアンの方々に対しては外国人（一般永住者）として生きるか、帰化して日本のフルメンバーになるのか、選択を迫ることになる」としながら、「これは在日コリアンの意識の問題ではなく、あくまで（日本の）制度としての問題」（カッコ内は筆者）であり、「日本政府が本腰を入れてこの問題に取り組むのであれば、日本国籍取得へのサポートをより拡充すべき」との主張がなされる。要するに、ここでも在日コリアンという外国人に関する決定の主体は「われわれ」＝ネーションにあることが強調され、その問題解決の方向性は在日コリアンの日本への帰化に求められている。

（2）「移民国家ニッポン」というビジョン—特集「移民と在日外国人」—

第六期前期における雑誌『SAPIO』の外国人・移民関連記事を代表する特集は、「移民と在日外国人」（2014年6月号）であろう。そのサブタイトルにあるように、同特集は政府・自民党による外国人移民「年間20万人受け入れ」構想とその反響（政治争点化）を受けて組まれている。また第五期（後期）の同誌の特集記事の特徴づける二項対立的な論争記事という形式も引き継いでいる。すでに述べた移民・外国人管理の主体としての「われわれ」＝ネーション（国民）という主体とともに、第六期の特集に引き継がれた二項対立的な論争記事という形式が、具体的な移民政策の提言とその政治争点化を受けて、どのような移民や外国人に対する言説を産み出していったのだろうか。

まず同特集では、政府・自民党による「年間20万人受け入れ」構想を、「いつも通りの政官業トライアングルによる御都合主義の政策転換」「不純な動機で移民を受け入れようとする今の流れは非常に危険だ」として批判する。そのうえで読者に対して、「しかし将来の国の形として、移民なしの未来図はまずあり得ないだろう。誤った移民論が出てきた今こそ、その功罪を冷静に分析、検証し、本当にあるべき移民国家ニッポンの姿を考えるべきだ」と呼びかける。

特集では続いて「データ解析」と銘打って、「移民は【必要】だ」「移民は【不要】だ」という二項対立的な論争記事が掲載される。また記事「移民受け入れ先進国の制度と法律とメリット、デメリットはどうなっている？」でも、「（移民受け入れの）メリット/デメリット」という形で、同様の二項対立的な構図が持ちこまれている。第五期の後期でもそうであったように、このような二項対立的な論争の構図がもたらす帰結は、移民を選別したうえで必要な移民ならば受入れ、不要ならば受け入れないというこ

と⁶⁾、さらに移民の要不要を判断する主体が、他ならぬ「われわれ」=ネーション(国民)であるという論争の前提の再確認、ということである。

ガッサン・ハージ(Hage, Ghassan)は、『ホワイト・ネーション—ネオ・ナショナリズム批判—』のなかで、オーストラリアにおける移民論争について、「アングロ」たちは「エスニックな他者」を排除したいか、歓迎したいかにかかわらず、それを決定する権利が自分たちに存在することを、彼ら白人オーストラリア人が楽しむ儀礼的な「移民論争」を通じて確認している。そのようなナショナルな統治権を持っていると考える人々によって、「エスニックな他者」たちは統治される受動的客体として構築される[Hage,1998=2003:40]、と述べている。

ハージのいう移民論争を通じて自身を「ナショナルな統治権を持っていると考える人々」によって、「エスニックな他者」たち(本稿でいう在日外国人や移民)が統治されるべき受動的客体として構築される時、同特集に現れるのが「移民国家ニッポン」というビジョンである。

同特集の最後の記事「右翼も左翼も関係ない、国を愛し憂えるならば世界唯一の『ニッポン移民システム』を作れ」(大前研一, 2014年6月号)では冒頭、「『移民受け入れ』を決断するならば国家の基盤を左右しかねない大きな政策転換になるだけに、実行には具体的かつ戦略的なビジョンが必要になる」と述べられている。ここで「戦略的ビジョン」を持って「国家の基盤を左右しかねない」政策を立案・実行する統治的な主体が誰であるかは明らかである。明らかだからこそ、誰とも明示されないその主体に対して、「右翼も左翼も関係ない、国を愛し憂えるならば世界唯一の『ニッポン移民システム』を作れ」との呼びかけが可能なのである。この呼びかけの相手こそ統治的な主体である「われわれ」=ネーション(国民)であり、彼らが主体となって作る「ニッポン移民システム」であり、「移民国家ニッポン」ということになるだろう。

ではこうした「移民国家ニッポン」というビジョンのもと、同特集では受動的客体としての「移民」や「在日外国人」はどのように構築され、彼らを統治する主体としてのネーション(国民)の自画像(アイデンティティ)はどのように描かれることになるのか。

記事「心構え 外国人に『日本の価値観』を理解させるために私たち自身も伝統と美徳を取り戻すべきです」(櫻井よしこ, 2014年6月号)では、「外国人が日本にうまく溶け込むには、国の文化習慣を理解し、『日本らしさ』の価値観を共有してもらうことが不可欠だ」と述べ、「そのためには、まず日本人こそが変わらなくてはならない」と指摘する。ここでは「日本らしさ」の価値観を伝える側(主体=日本人)と、伝えられ側(客体=移民・外国人)という構図があり、客体=移民・外国人に対しては、「日本の文化や習慣を理解し…(中略)…かつ問題を起こしていないようなら永住ビザに切り替えればよい」、「さらに日本国籍を望むならば、日本人が大切にしている価値観を理解してもらっているかどうか、きちんと審査したうえで認めればよい」という選別基準が示される。そのうえで主体=日本人の側には、「本来日本人が持つ、親切心や思いやり、寛容さ、そして美徳を私たちもしっかり身に付けておくことが必要」とされる。

客体としての移民・外国人を、日本的な慣習や文化、価値観に向けて教導するという日本人(主体)

の「美德」(寛容さ)という一見ソフトな同化言説は、同特集における他の論者の主張にもみられる。例えば、呉善花は「鎖國的な国を目指せというのではなく、移民を受け入れるのであれば日本文化や慣習について学ぶ機会を設けるべきであり、丁寧なフォロー体制が必要だ」とする。石原慎太郎も同様に、外国人犯罪防止への解決策という形で「移民への教育です。日本の風土を愛し、法律や秩序を遵守する人材にすべく教育を施すのです」、「移民の制度化によって、日本の法律や秩序を遵守する、かつ優秀な人材を取り込むべき」との主張を展開したうえ、櫻井と同様に「受け入れる側の寛容も求められます。移民への教育だけでなく、我々受け入れる側の教育も必要」としている(2014年6月号)。

要するに、「移民国家ニッポン」というビジョンが前提としている在日外国人・移民は、統治の主体としてのネーションによる教導を通じて、日本的な価値観や美德、文化や習慣を身につける客体として構築されており、そうした日本への文化的な同化を受け入れていく客体としてイメージされている。そのような同化される客体としての在日外国人・移民像を前提として、「寛容な」統治的主体としての「われわれ」=ネーションもまた構築されている⁷⁾。

しかしながら、日本的な価値観や文化、習慣を受け入れに抵抗していると見なされる、あるいは外国人犯罪をはじめとする社会問題やトラブルを引き起こすと見なされるような在日外国人や移民の主体としての側面に直面したとき、寛容な統治的な主体としての「われわれ」=ネーションと、「移民国家ニッポン」というビジョンは安泰でいられるのだろうか。次の第六期後期の『SAPIO』の記事で確認してみよう。

2 第六期後期(2015年後半~2019年)

第六期の後期に入ると、まず中国関連の特集のなかで在日中国人の記事が出てくる。2015年10月号の「偽パスポート」、2016年4月号の「黒転白」(筆者注:不法入国などの非法移民を合法移民に偽装するビジネスなどを指す)、2017年12月号の「不法滞在 中国人実習生1万人が失踪した! 逃げ道に利用される『難民申請』が増加中」、「抜け穴だらけの健康保険が中国人に乱用されている」、「医療費を踏み倒す『困った中国人』たち」などの記事タイトルからは、第六期前期で期待された「日本の文化や習慣を理解し」、「日本の法律や秩序を遵守する」従順な客体としての移民や外国人ではなく、むしろ日本の習慣や法律を逆手にとるような狡さや強かさを持った主体としての外国人や移民が、「卑劣」で「困った」存在としてネガティブに描かれていくことになる。

また、こうした移民や外国人が集住する「中国人自治区」(2015年10月号)、「外国人自治区」(2017年5月号)が日本国内に形成されることへの不安や憂慮も語られる。例えば、記事「今の日本に『移民』は無理。このままなら『外国人自治区』ができてしまう」(ケント・ギルバート、2017年5月号)では次のように述べられる。「特定の地域に言葉の通じない異民族が集まってコミュニティを作ると、密入国者や不法滞在者が群れを成し、地元の警察官すら近寄れない無法地帯となる。そんな地域に住む外国人に参政権を与えたら、日本国内に外国人自治区を設けるようなものだ」と。

ハージはこうした移民の人口集中が多文化社会における統制的な主体としてのネーションにもたらす不安や憂慮の感覚の源泉について、以下のように述べている。

もちろん、混合者が何よりも憂慮するのは人口集中である。それはシチューのなかの小麦粉が固まっているようなものだ。これは、その存在が混合に抵抗しているか、そうでなければ混合者の混合能力が弱まっている証拠である [Hage,1998=2003:222]。

多文化社会オーストラリアの統制的主体であるべき「混合者」(アングロ系白人)にとってそうであるように、「移民国家ニッポン」の統制的主体=「混合者」であるべきネーション(日本人)にとっても、「外国人自治区」といった存在は、混合(あるいは同化)に抵抗する主体としての移民や外国人の存在への憂慮と同時に、統制的主体としての自らの混合(あるいは同化)能力の弱体化という意味での不安をもたらすことになる。それはまた「移民国家ニッポン」というビジョンに揺らぎをもたらすことになる。

(1) 統制的主体の不安—特集「在日外国人256万人の光と影」

2018年8月号の特集「在日外国人256万人の光と影」は、こうした移民や在日外国人を管理する統制的主体としての不安を反映した誌面となっている。

「いつの間にか世界第4位の『移民大国』になった日本の難題」という同特集のサブタイトルからは、第六期前期の特集「移民と在日外国人」において主体的に取り組む国家的ビジョンであった「移民国家ニッポン」にみられた力強さは伺えない。あるのは「いつの間にか…(中略)…の『移民大国』」という「難問」であって、その「難問」への回答が特集中にあるわけではない。「外国人の単純労働者受け入れには断固反対する」との「提言」記事はあるが、受け入れに賛成する提言記事はなく、第五期後期から第六期前期にあった二項対立的な論争の構図は崩れている。また同じ第六期後期の先行する記事にみられた日本の法律や制度(健康保険や扶養控除制度)を外国人に「食べ物にされる」という記事や、同特集における在日ベトナム人の「地下ネットワーク」を犯罪と結びつける記事のように、移民や外国人を犯罪や社会問題と結びつけてネガティブ(在日外国人の「影」)に取り上げている。

さらに同特集で特徴的なのは、日本における外国人の集住地域にフォーカスしている点にある。記事「人種のるつぼ なんと、20歳の87%が外国人の『国際カオス・タウン』大久保1丁目を歩いた」や「衝撃の実態 東京に出現した『75%が外国人の街』」「激変! 中国人の中国人による中国人のための『新チャイナタウン』西川口へ行ってみた」(2018年8月号)がこれに該当する。

こうした外国人の集住の実態にフォーカスするのは、先に述べた「外国人自治区」のイメージのように、そのなかで移民や外国人は適切に「混合」されているのか、あるいは「同化」されているのかどうか不安だからである。「人種のるつぼ」「国際カオス・タウン」「衝撃の実態」「激変!」「中国人の中国人による中国人のための『新チャイナタウン』」といった記事タイトルにも、そうした不安の感情が覗いている。実際に、西川口の「チャイナタウン」を取り上げた記事では、「街の中国色があまりに強すぎるため、

これを『よい変化』と呼んでいいかは悩ましい部分もある」とされる。しかし他方では、記事「東京に出現した『75%』が外国人の街」のように、「異文化を積極的に取り入れて多様性を深めてこそ日本は成長する」とされ、ポジティブに評価する記事もある。

では記事中で外国人の集住がネガティブでなくポジティブに評価されるのは、どのような集住に対してなのだろうか。再び、ハージの議論を参照してみよう。

多文化社会を維持するためには、多数の文化が必要である。しかしながら、ただこうした文化をほうっておいても、諸文化は混合されない。あるいは、少なくとも適切に混合されることがなく、エスニックな緊張や戦争をもたらす。うまく混合させるためには、すべての食材のなかでもっとも価値のある白人のエッセンスに導かれる必要がある。白人のエッセンスとは、すなわち民主主義的で、寛容な、言論の自由という食材だ。そして白人貴族たち(White aristocracy)のみが、さまざまな食材をオーストラリアのシチューのなかにもどのように投げ込めばいいのかを知っているのである [Hage,1998=2003:216]

この「白人のエッセンス」＝「民主主義的で、寛容な、言論の自由という食材」の部分、第6期前期の「移民国家ニッポン」というビジョンのなかで、移民を混合あるいは同化していくうえで最も重要とされた、いわば「日本人のエッセンス」である「日本的な価値観、美徳、文化や習慣」で置き換えてみよう。もし「日本的な価値観、美徳、文化や習慣」というエッセンスが少しでも効いているなら、移民や外国人の集住地区であっても、それは適切な混合(あるいは同化)の現場であって、移民や外国人を管理する統治的主体としての「われわれ」＝ネーションの不安は顕在化しないだろう。

『『国際カオスタウン』新大久保1丁目を歩いた』と題する同特集の記事では、地域の古参ネパール人の「まず外国人が日本のルールを守ることです。日本語や文化を学ぶことはもちろん、挨拶を大事にしたり約束を守ったりと、日本人から学ぶことは多い」との意見を紹介し、また日本人住民の「韓国人のような先に住み始めた外国人が、ネパール人やベトナム人など次に来る外国人に教育していく、というのが理想です」という声も紹介する。そして記事の最後は「『国際カオス・タウン』がどのように進化していくのか注目していきたい」と締めくくられる。移民や外国人がこのような「日本的な価値観、美徳、文化や習慣」を受容する限りにおいて、統治的主体として「われわれ」＝ネーションの側は「カオス・タウン」における「人種のるつぼ」という混合を安心して「注目」でき、時には楽しむことすらできるだろう。

以上のように、同特集は移民や外国人を管理する統治的主体としての潜在能力(移民や外国人を客体として取り扱う)の陰りと対をなすように、一方では在日外国人や移民を日本の法律や制度、慣習

表3 第六期後期の『SAPIO』在日外国人関連記事(2015年後半～2019年)

2015年	
10月	< INVESTGATIVE REPORT >中国経済崩壊 これから起こる恐ろしいこと 経済難民 偽パスポートを持った「なりすまし」が続々上陸中! 日本に「中国人自治区」ができる日 (坂東忠信)
2016年	
4月	< SPECIAL REPORT >中国よ! その「嘘」はもう通用しない 三行広告 在日中国人向けフリーペーパーに書かれている秘密の言葉「黒転白」を知っていますか? 不法入国でもビザ入手可能? 国際電話が永久にタダ? (西谷格)
2017年	
5月	< OPINION >禁断の日本再生論 外国人労働者 今の日本に「移民」は無理。このままなら「外国人自治区」ができてしまう 40年近く日本で暮らす私が肌で感じる危機 (ケント・ギルバート)
12月	< INVESTGATIVE REPORT >中国が日本でしている卑劣なこと
〃	不法滞在 中国人実習生1万人が失踪した! 逃げ道に利用される「難民申請」が増加中 (坂東忠信)
〃	制度の欠陥 抜け穴だらけの健康保険が中国人に乱用されている 東京・荒川区では出産育児一時金 42万円受給者の26%が中国籍 (清水典之)
〃	医療トラブル 訪日観光客が増え続ける一方で、医療費を踏み倒す「困った中国人」たち 大阪では2割の病院が外国人の医療費未払を経験 (西谷格)
2018年	
8月	< SPECIAL REPORT >在日外国人256万人の光と影 いつの間にか世界4位の「移民大国」 となった日本の難問
〃	提言 外国人の単純労働者受け入れには断固として反対する 日本の賃金低下を招き、新たな差別を引き起こしてしまう (森永卓郎)
〃	人種のつぼ なんと、20歳の87%が外国人の「国際カオス・タウン」大久保1丁目を歩いた アジア、中東、アフリカの文化がぶつかりあう (横田徹)
〃	衝撃の実態 東京に出現した「75%が外国人の街」(三浦展)
〃	地下ネットワーク 日本人が知らない在日ベトナム人の「犯罪SNS」に潜入した ついに 検挙件数が中国人を抜いてトップに (出井康博)
〃	彼らの事情 コンビニ外国人はなぜ4万人もいるのか? 最近はウズベキスタン人も働いている (芹沢健介)
〃	問題摘出 外国人に日本の「健康保険」と「扶養控除制度」が食い物にされている なんと 扶養親族を26人以上も申告していたケースも! (清水典之)
〃	激変! 中国人の中国人による中国人のための「新チャイナタウン」西川口へ行ってみた かつての裏風俗は消え、中国語の看板が光っていた (安田峰俊)
〃	
12月	< INVESTGATIVE REPORT >外国人大流入で何が起きているか
〃	警鐘 安倍政権「移民政策」は天下の愚策だ このままでは欧州のようにネオナチが出現、 排外主義の火が燃え盛ってしまう (本誌編集部)
〃	日本人には見えない世界 ニッポンの闇労働現場で働く中国人不法就労者「黒工(ヘイゴン)」 たちの告白 消えた中国人技能実習生、留学生はここにいた! (安田峰俊)
〃	政府計画の罪 出稼ぎ目的の「偽装留学生」が急増し移民化している 大阪「外国人留学生

- 300人超退学事件」の闇（出井康博）
- “ 闇事件ファイル 警察がアピールする「外国人犯罪は横ばい」はまったく信用できない レイプ、殺人、強盗など凶悪事件も次々に発生（清水真）
- “ 夜遊びのマナー 中国人の“日本人女性爆買” ご乱交現場 「300万円払うから蒼井そらに会わせて」 ソープに入ったとたん女の子の服を引き裂く、頭の上にタバコの灰を落とす（西谷格）
- “ ムスリムが暮らす街 在日パキスタン人が暮らす街・射水スタンを訪ねて コーラン冒瀆事件から17年——日本人、そしてロシア人との不思議な共生（前川仁之）
- “ 事件真相 【千葉女児殺害事件】リンちゃん一家はなぜ日本で暮らしていたのか？ 在日ベトナム人急増の街で悲劇は起きた！（水谷竹秀）
- “ 日本に暮らす難民 クルド人2000人が暮らす「ワラビスタン」（埼玉県蕨市・川口市）の亀裂 祖国を持たない世界最大の民族はなぜ日本に行き着いたのか（山川徹）

2019年

2月

2019年大予言 平成最後の大動乱

移民政策 改正入管法は天下の愚策！外国人労働者受け入れ拡大で日本が減ぶ（藻谷浩介）

（注）大宅壮一文庫「雑誌検索データベース Web OYA-bunko」（<https://www.oya-bunko.com/>）にて検索（検索キーワード：外国人）、記事内容を確認のうえ筆者作成。

を逸脱する主体としてネガティブ（「影」）に表象していた。他方、移民や外国人の集住地域を取り上げる記事では、統治的主体としての潜在能力がまだ有効である徴として、日本的な価値観や美徳、ルールや慣習を受け入れる客体としての移民や外国人を見出す限りにおいて、彼ら（と彼らの集住地域）はポジティブ（「光」）に表象されていた。

（2）「移民国家ニッポン」というビジョンの揺らぎ—ネガティブ化する移民・外国人のイメージ—

最後の特集「外国人大流入で何が起きているか」（2018年12月号）では、政府による「入管難民法の改正案」について、特集記事タイトルにあるように「安倍政権『移民政策』は天下の愚策だ」として批判する。また特集巻頭の「このように『移民』は副作用が大きく、国の在り方を変えてしまうため、熟議を重ねなくてはならない問題のはずだ。しかし、日本では真実が知らされぬまま議論も尽くされず、なし崩し的に『移民国家』に変わろうとしている」という一文からは、外国人や移民を管理する主体として疎外され、「なし崩し的に『移民国家』に変わろうとしている」ことへの無念、統治的主体としての不全感あるいは無能感も同時に読み取るができる。

移民や外国人を管理する主体（統治的主体）としての無力の表明に続いて、＜INVESTIGATIVE REPORT＞と銘打った同特集では、「まずは7本の現場ルポで、現在外国人が住み、働いている場所で何が起きているのか知っていただきたい」と特集の主旨が説明される。そのうえで「様々な歪みから外国人による犯罪が起きている場所がある。一方で過去の対立や反省から共生を実現している所もある。そうした現実も踏まえて、日本人皆で日本の行く末を考えるべきではないか」と呼びかけが行われる。しかし、同特集において重きが置かれているのは、明らかに前者の「様々な歪みから外国人による犯罪が起きている場所」であり、具体的には「警察『外国人犯罪は横ばい』発表のまや

かし、「外国労働者、留学生の闇事件ファイル」、「中国人不法就労者『黒工（ヘイゴン）』直撃インタビュー」といった形で、特集の冒頭ページに掲げられる。反対に「共生の現場」を取り扱った記事タイトルは冒頭には掲げられない（2018年12月号）。

これらの冒頭で掲げられた記事においては、外国人たちは「日本人には見えない世界」の住人であり、「在日中国社会の最末端にうごめく人々」であり、しばしば「闇」という言葉とともに記事では紹介される（「ニッポンの闇労働現場で働く」「闇事件ファイル」など）。記事中では、彼ら外国人は日本社会の受け入れ態勢の不備や歪みの被害者としても語られるが（例えば「黒工と彼らを取り巻くダーティーな在日中国人コミュニティが生まれた背景には、こうした日本の労働行政のエラーがある」安田峰俊、2018年12月号）、「闇」という日本社会・日本人から不可視な存在である彼ら外国人の現場をみようとする特集での試みは、結局のところ不気味な存在として「われわれ」＝ネーションの管理する能力が十全には及ばない、「治安に影響しかねない」「レイプ、殺人、強盗など凶悪事件も次々に発生」させるリスク源（有害な主体）というネガティブな外国人や移民のイメージを浮かび上がらせることになっている。

第六期後期では、外国人や移民の管理の主体である「われわれ」＝ネーションの統治的主体としての潜在的能力の不全が感じられるほど、換言すれば統治的主体が移民や外国人を十分に管理の対象（客体）化できないとイメージされるほど、彼ら移民や外国人はよりネガティブに表象されていくことが明らかとなった。2018年8月号の特集「在日外国人256万人の光と影」では、こうした移民や外国人を管理する統治的主体とその潜在能力への不安を反映して、移民や外国人は「光と影」、ポジティブとネガティブの両義性を持つものとして表象されていた。それが次の特集「外国人大流入で何が起きているか」（2018年12月号）になると、統治的主体としての潜在能力に対する不全感や無力感の高まりに応じて、移民や外国人の表象はよりネガティブになり、外国人犯罪に象徴されるイメージが再び雑誌『SAPIO』誌上で浮上することになったのである。

IV おわりに—一回帰する外国人言説—

本稿でみてきた雑誌『SAPIO』の2010年代における外国人言説の変遷は、同誌の創刊から数年間の外国人言説を特徴づけていた「混住国家ニッポン」というビジョンが揺らぎ、失効していった過程と驚くほど重なり合っている。

改めて確認してみると、第一期の「混住社会ニッポン」というビジョンのもと、混住すべき他者として暗黙に想定されていたのは、『SAPIO』の主要な読者層である企業サラリーマン層からみて同質性が高く、理解可能でコントロール可能な客体、いわば異質性や他者性を縮減された「外国人」であった。それゆえ、「外国人」がより異質で他者性を帯びた、理解可能性やコントロー

ル可能な客体にとどまらない主体として現れるなら、「混住社会ニッポン」というビジョンは揺らぐことになる。実際、第一期の記事においては、外国人犯罪といった異質性や他者性の兆候、理解不可能性やコントロール不可能性に直面するや、「混住社会ニッポン」というビジョンは揺らぎ、「混住社会」を実現すべき主体としての「われわれ」=ネーションという自画像とともに失効していき、次の第二期ではビジョンなきまま外国人犯罪に関する記事や特集が組まれることになった[倉,2007:118-124]。

以上の第一期から第二期にかけての外国人言説の展開を、本論考を通じて考察してきた2010年代の第六期の雑誌『SAPIO』における外国人言説と比較してみよう。

第六期の前期において、「移民社会ニッポン」というビジョンとそれを実現すべき統治的主体としての「われわれ」=ネーションは、既述のとおり「日本的な価値観や美德、文化や慣習」を受け入れる（同化される）「客体」、「日本の法律や制度を遵守」するように教導される（他者性を縮減された）「客体」としての移民や外国人を前提にしていた。このような同化されることを期待され他者性を縮減された「客体」である限りにおいて、「寛容」をもって彼らを教導し、「移民社会ニッポン」を作り上げるネーションの統治的主体としての潜在能力が担保されるわけである。それゆえ、移民や外国人を管理する潜在能力の不全（移民や外国人を客体として扱えない）は、そのまま「移民国家ニッポン」というビジョンを揺るがせ、それを実現すべき統治的主体としてのネーションの不安も惹起することになる。

2010年代後半、特に2018年の2つの特集記事を通じて、さらに「移民国家ニッポン」というビジョンの揺らぎ、統治的主体の不安はその潜在能力への不全感や無能感とともに亢進していった。その結果、特集記事での移民や外国人のイメージも、ポジティブとネガティブを含む両義的なものから、外国人犯罪に象徴されるネガティブなイメージが前景化していった。

以上のように、第六期における雑誌『SAPIO』の外国人言説の変遷は、1990年代初頭の第一期から第二期にかけての「混住社会ニッポン」というビジョンの揺らぎとその失効のプロセスとびたりと重なり合う。2010年代における「移民国家ニッポン」というビジョンとその揺らぎは、『SAPIO』誌上における外国人言説の四半世紀を経た回帰としても把握することができる。

<注>

- (1) 同様の指摘は樋口直人も行っている。「在日外国人に対する右派論壇の関心は、全体としてかなり低いものとみてよいだろう」[樋口,2014:153]。
- (2) 雑誌『SAPIO』は、30代の男性ビジネスマンを主要読者層としていた他の競合誌と比べ、読者層の幅がより若い年齢層に広がった可能性がある。

[倉,2007:115]からの再掲になるが、2002年に日本雑誌協会が調査した読者構成データによると、性別では男性が圧倒的に多い(86.4%)。職業別では営業職24.2%、一般管理職

15.8%に会社役員、専門技術職、事務職を加えた合計が55.2%となり、企業サラリーマン層中心の読者構成が認められる。世代構成では、年齢層が若く（最も多いのが25～29歳で26.8%、ついで30～34歳の19.8%、20～24歳の19.5%）、学生の読者も11.7%と比較的多い。日本雑誌協会「JMPAマガジンデータ」&「JMPA読者構成データ」(<http://www.j-magazine.or.jp/>)を参照。

以上のように、『SAPIO』の読者層は男性の企業サラリーマン、かつ学生を含めた20代～30代前半の比較的若い年齢層が主要な読者であると指摘できる。

- (3) 1989年創刊から月2回刊行であったが、2012年から月刊、2017年からは隔月刊となり、2019年より不定刊行となっている。
- (4) 第五期後期の記事のうち、[倉,2009:81-82]の表4に掲載できなかった2008年後半以降のものは以下のとおりである（別表1）。

別表1 第五期後半の『SAPIO』在日外国人関連記事の補足（2008年後半～2009年前半）

2008年				
8月6日	蝕む！中国黒社会「日本占領」	第4部	人蛇たちの「窃盗教室」	1回（袁翔鳴）
11月12日	蝕む！中国黒社会「日本占領」	第4部	人蛇たちの「窃盗教室」	6回（袁翔鳴）
11月26日	蝕む！中国黒社会「日本占領」	第5部	紳士・淑女となった黒社会	1回（袁翔鳴）
12月17日	蝕む！中国黒社会「日本占領」	第5部	紳士・淑女となった黒社会	2回（袁翔鳴）
2009年				
1月5日	蝕む！中国黒社会「日本占領」	第5部	紳士・淑女となった黒社会	3回（袁翔鳴）
7月8日	<SIMULATION REPORT>日本人でよかった 治安 犯罪「急増」「凶悪化」「低年齢化」はマスコミの嘘 日本は今も世界に誇れる 「安全な国」だ 「治安悪化」「少年・外国人犯罪増加」のデータなど存在しない（浜井浩一）			

(注) 大宅壮一文庫「雑誌検索データベース Web OYA-bunko」(<https://www.oya-bunko.com/>)にて検索（検索キーワード：外国人）、記事内容を確認のうえ筆者が作成。なお第5期後半の記事のうち2008年前半までの在日外国人関連記事については、[倉,2009:81-82]の表4を参照。

このうち『SAPIO』2008年1月4日号から始まった中国人ジャーナリスト袁翔鳴による連載記事「蝕む！中国黒社会『日本占領』」は、「日本に巣くう中国『黒社会』の暗躍と裏コネクションを、新連載で徹底追及」と宣言する。同連載は「暴力団も使い回す巨大強盗団の首魁」（第1部）から順に「日本の裏社会で“開業”する『中国地下銀行』の巨大資産」（第2部）、「パスポートも戸籍も偽造！中国人を日本人に仕立てる『新・蛇頭』の手練手管」（第3部）、「人蛇たちの「窃盗教室」」（第4部）と続き、「紳士・淑女となった黒社会」（第5部）で終了している。連載全体として犯罪や非合法移民に係る「中国黒社会」が、「裏社会」での「裏コネクション」を介して日本に定着していく様を、「日本に巣くう」「蝕む！」「日

本占領」とセンセーショナルに描き出す。

ここでの「中国人黒社会」とは日本（表社会）からみれば「裏」にある別世界、すなわち<迂遠>なものであると同時に、日本（表社会）に「巣くう」、「蝕む」ほどには<卑近>なものとしても描かれる。こうした二重性は、第5部「紳士・淑女となった黒社会」に最もよく表れている。彼ら、彼女らは「紳士・淑女」として「表の社会でも地位と名誉を得て…（中略）…日本に溶け込んでいく」（2008年11月26日号）卑近な存在であると同時に、日本国内に「中国黒社会」という異質な「疑似国家的な組織を…（中略）…築いている」迂遠な存在でもあり、日本の捜査当局によって「本当の危機はこれから来る」（2008年12月24日号）とされる存在（リスク源）でもある。

フーコー（Foucault, Mitchel）によれば、このような二重性によってマスメディアが描き出すものこそ「非行者」である。

探偵〔警察〕文学と結びついた三面記事が一世以上のおいだ生みだしつづけたのは過度に多数の《犯罪物語》であって、そこではとりわけ非行性はきわめて卑近なものとして同時にまったく無縁なものとして、日常生活に永久に脅威を与えるものとして、だがその起源や動機や日常性でしかも異国的な姿をみせるその環境などの点では迂遠なものとして現われる [Foucault, 1975 = 1977 : 283]

また規律訓練の権力がその対象とするのは、フーコーが指摘するように「法律違反者」でなく「非行者」であり、その本性としての「非行性」である。『SAPIO』の同連載記事に描かれた多数の「非行者」とその多様な「非行性」イメージは、警察や入国管理局による「取り締まりの総体を人々に承認可能な事態に仕立て上げる」 [Foucault, 1975 = 1977 : 283] ことになるだろう。第五期の『SAPIO』における移民や外国人を管理する「われわれ」= ネーション（国民）という主体は、このような「非行性」の産出をつうじても構築されているのである。

- (5) 「外国人参政権法案」をめぐる外国人問題の安全保障化については、[樋口, 2014 : ch. 7]で詳しく論じられている。
- (6) 付言すれば、移民の必要／不要を判断して選別する主体が、「われわれ」= ネーション（国民）ということであれば、その判断基準は端的に「国民」の利害関心、すなわち「国益」ということになるだろう。同特集における記事「参政権 EU型、英連邦型、北欧型……『外国人参政権』を論じるには、まず『国益』を示せ」（本誌編集部，2014年6月号）には、移民を入れる／入れない、在日外国人にどの権利を与える／与えない、という選別や判断基準としての「国益」の側面が赤裸々に現れている。
- (7) よって同特集における記事では、櫻井も石原も永住外国人への参政権の付与には反対であり（「帰化すればいい」）、同時にヘイトスピーチのような不寛容な排外主義的な言動には批

判的である。同じ特集の記事「差別 在日コリアン、在日中国人との共生をぶち壊す先進国として恥ずかしいヘイトスピーチ」(2014年6月号)も参照のこと。

このことは、寛容なナショナリスト(の实践)と排外主義的なナショナリスト(の实践)の間には、決定的な違いや対立があるわけでないことも示している。「ナショナリスト的な排除の实践を行なう人々と、ナショナリスト的な包摂の实践を行なう人々との違いは、排除しようとする人々と包摂しようとする人々とのあいだの対立なのではない。むしろ両者の違いは、寛容の閾の違いなのである」[Hage,1998=2003:179-180]。

<文献>

阿部純一郎 2006 「市民権の空洞化と〈同化〉論争：国民の境界をめぐるダイナミクス」東京社会学インスティテュート『コロキウム：現代社会学理論・新地平』No.2、新泉社：144-162.

Foucault, Mitchel 1975 *Surveiller et punir : Naissance de la Prison*, Gallimard. = 1977 田村俣(訳)『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社.

Hage, Ghassan 1998 *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural society*, Pluto Press Australia. = 2003 『ホワイト・ネイション—ネオ・ナショナリズム批判—』平凡社.

樋口直人 2014 『日本型排外主義：在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.

倉 真一 2007 「保守系オピニオン誌における外国人言説(1)：1990年代前半までの雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』14(1)：113-128.

_____ 2008 「保守系オピニオン誌における外国人言説(2)：1990年代後半における雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』15(1)：103-113.

_____ 2009 「保守系オピニオン誌における外国人言説(3)：2000年代における雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』16(1)：69-87.

倉橋耕平 2018 『歴史修正主義とサブカルチャー：90年代保守言説のメディア文化』青弓社.

吉見俊哉 2003 「雑誌メディアとナショナリズムの消費」『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院：261-279.

<参考資料>

小学館『SAPIO』1989年創刊、2019年より不定期刊行。

大宅壮一文庫「雑誌検索データベース Web OYA-bunko」(<https://www.oya-bunko.com/>)

日本雑誌協会「JMPAマガジンデータ」&「JMPA読者構成データ」(<http://www.>

j-magazine.or.jp/)